

特104

97

神子自覺療道法



始



心靈改造
生命長壽
神仙自覺療道會治療法

本療道は宇宙自然の真理と大精力の信念を以て人間生活の基礎を定め有ゆる精神界に横たはる迷信
 疑念を一掃せしめ而して心靈改造に勉め以て生命長壽の目的を達する神仙自覺療道會なる者を設けし
 ものなり。古今東西の別なく苟も光榮ある生活を營み不朽の事業を人生に寄與せられたる者は其の精
 神界たると物質界たるとを問はず皆堅固なる信念生活の上に立ち其の確信に由つて安心に長壽の工夫
 を得て以て向上發展の實を擧げたるものに外ならず、若し自覺信念なき人は其の思想常に動搖して固交
 持する能はず只徒らに憤怒し嫉妬し恐怖し悲哀し其の生涯は單に酔て生き煩悶病苦し夢に死し終はら
 しむるのみ。

本會は大に感ずる處あり文物の進歩に引替へ精神界に於ける趨勢の振はざるのみか却て退歩せる
 實に人生上一大缺點と云ふ可く茲に世の要求に應じ斯界の一大救助に勉め天與の職分を全ふせんとす
 微意の存する所御賢察あらば幸甚。

會主自覺

心靈改造 神仙自覺療道治療法

本療道法に關しては特に注意して置く可きは本書を最初より熟讀し一字一行たり共見落す様の事ありては効力なく折角の目的たる療法も無意味に終らしむるに至れぬ矣れくも御承知せられ毫も疑ふ事なく萬一にも疑門のある場合は御照會次第御答へに應ずべし (返信料を要す)

人は何處より來りしか 生命の本源を自覺する事、本療道法に由り目的を達せんと欲せば第一に人生の來りし本源を自覺せねばならぬ、人が此の世に生れて來たのは自分で望んで生れたものでもなければ又生れたいと思ふて骨折た爲めでもない草木や鳥獸は生きて居ながら其の身が生きて居ると云ふ事も知らずに空らくて其の目を送つてあるが人の生れ始めも之れと區別はなく赤兒は自分があると云ふ事も知らずまるで無心で己はどこから來たかと云ふやうな疑ひも起さないのである、されども時が來れば自己の生きてある事が確かな事實である事を知りそれと同時に自分の身の上と周囲の世界を觀察するやうになつて來るのは人間自然の本能であるからあらゆる

様々は果して何處から來るのであるかと云ふ新しい考へが起つて來て其の解決はなかく容易につかずさりながら自分の自由勝手にならぬ以上に於てはそもくの根本は人間を作られたものがある。と云ふ事に氣が付くであらう、之れぞ即ち宇宙自然の眞理と大精力たる神である事が明白になる。

其の神はどんなものでどんな力があるものか 唯神と云

ふても人間の目にも見えず又おれが神であると云ふものでもないから分らないから神などあるものでないと思ふと其れこそ大なる間違ひである、何故かと云へば此の宇宙を造られる程の神が僅か人間位の小さな一動物がどうして見ることが出来るものか神はそんな小さなものでない實に實に大きなものである例令て見れば丁度虱や蚤に人間はどんなものであるかと問ふと同様に決してあの小蟲が人間を知る事が出来ようかやうやく其れを押へる指一本さへ丸々見る事さへ出来ようかそれと同じ事で決して人間ちきくに見へ得るようなものでない事は考へて見れば分るはづ然らばどうして神の存在を知るかと云へば宇宙間にありとあらゆる萬物を見て何一つ愚かのない又想像だもつかぬ巧妙さや數知れない程を造られある物を見て知る事が出来るはづ必らずや自から出來た物とは思はれない例令ば人が一つの技巧により造花を見ても其の實物に近く上手に出來て居ると如何にも其の造花を見るだけできよなる人と想像されるであらう又風景の畫を見て實景に似て居れば畫に上手な人と云ふ事を知り又歴史や言行録を讀んで楠公父子は忠臣であり大西郷は豪傑の人と云ふ事

が知り得ると同じ道理である造花や畫は唯如何に巧妙とは云へ實物に似たに過ぎないが自然の花木は時をりて芽を生じ成育してつぼみ満開し花終れば實を結び翌年生すべき種子を残して一代を終るなどの自然の妙技に至つてはとて人も人間如き知識のうかひ知らるべき力らのものでない又此れを保護せらるゝに於ても絶對的に自衛自衛力や其の方法も與へられある事は勿論の事で云ふ迄もない唯一言にして無限と云ふ一語より外にないのである斯く云へば諸君にして最早人間以上に大なる且つ無限力の神のがあると云ふ事は毛頭疑ひの餘地なく合點せられたであらう。

生命と自衛力を與へられある神即ち自然眞理には絶對的服従すべきものたる事の自覺 前章に於て宇宙には人間以上無限力を有する神と云ふ事を自覺せられたるがさて此の神即ち人間其他萬物を造られた親神たるに對してはあく迄従がはねばならぬと云ふ事が生じてくる事は此れ又自然の争ふ可らざる眞理である然るに世の大方の人々は此の自然の眞理たる神に服従せずして爲めに色々煩悶を生じ苦痛し又は諸病に犯され困難するのみか大切なる一命を奪はれ悲惨事を現出せる其の數幾萬あるや數知れず然り而して何故服従せざるかに付き考ふるに畢竟自然の眞理を知らざるによるものにして誰か眞理を自覺せばいかで服従せずして可ならんや而し茲に特筆すべきは何人も此の服従と云ふ事をきらい窮屈に思ひ知らずくの間

に自分が欲するまゝに自由行動を取るもの多きは人情の然らしむる處

ならん茲に於て其の服従と云ふ事はどんなものであるかに付き得心の行く様述べて見よう。

人生は全く服従なくして存立するを得べきものに非ず

服従と云ふは各々其の從屬して居る宇宙又社會の法則に準じ據る事をいふのである先づ順序として少年時代に現れて來る服従の事を云へば老人が青年や小供に服従を求めるのは青年や小供が憎いからでもなければ自分で威張りたい故でもなくつまり必要に迫らるゝからである譬へば親が東西も知らない小供に勝手次第に捨て置けば火の何たるを知らず此れを取らんとし刃の切れる事を覺らず弄あそぶのを見れば如何に危険であらうか又諸君が若し何處か知らぬ處に行くに當りて安全に旅行をしたいと思ふならばよく道を知つて居る案内者の跡に付いて行かねばなるまい小供や青年の經驗なき者に取りては人生は未知の國であるから案内者の必要は云ふに及ばぬではないか服従は人から道を教へて貰ふのである人間の自然の案内者は父母か又大人の父母は神である世の中に生れ出てから年月も経ず萬事に何の經驗もない者に勝手に一家を棄したり一身の健康や將來を壞されて一家全體の利益を破る様な危険な事はされぬ理論から見れば此れ程分り易い事はないのである然し實際は容易でもなか／＼理窟通りには行かないのである服従は自然であるのに實際は何故困難がるのは如何なる理であるか少しく此點を述べて見よう。

人は萬物の靈長と云ふ大切の寶がある即ち精神之

れなり 少しく説明が後戻りをする様であるが茲に此れを述べないと分りにくい止むを得ない前項では生命の本源を述べて置いたがさて人は何である人は何んな種類の動物であるかといへば外形より一見する限りでは人は物質の混合物である古は萬物を動物界植物界礦物界の三つに大別してあつたが此の分類によると人は肉體の方から見れば重力の法則によると小石も同様で斷崖に立つて一步踏み滑らせれば直に轉がり落ちて生命のない石瓦も同様で更に區別はない泣いてももがいても甲斐はない重い物を上から下方に引き落すのに人間であるからの小石であるからのと別に斟酌もせず區別もない又人の肉體が礦物界に屬する事も一つ理由がある人は土から來て化學作用に由りて之れを分解すれば地上到る處にあるようないろ／＼の元素に還ることが出来るのである又其の營養を植物からとる點は人も植物に屬して居るから植物が無くては一日も生存を保つことが出来ない土地の中には人身を構成する物質を含んでは居るけれ共人は土地其のまゝで營養とすることは出来ない土を食ふと云ふたら諸君は胸を悪くせらるゝであらう人の胃は植物が形をかへてくれた土を消化するのである諸君は肉を食ふて居ると言はるゝが宜しい然し植物を食ふた獸が諸君に肉を供給するのであるから一口に言へば植物は人類第一の食物である最後に人は動物界に屬して居る人身の構造は温血動物のそれと相違はなく其の官能はと云へば動物の方が概して目もよく利き耳も敏く鼻も鋭くよく自衛機關の用をなして人のよりも敏捷であるが之人間も獸類同様に餓や渴や痛みも感じ年數が

八
經てば齒も老り死にもする、然らば人は動物なりと云ふてよろしい併し人は獸類と種類が同じと云ふことが言はれよか一方から人と獸と類似の處のみを擧げて論ずる人があれば其の反對に比較のあまりに當を失するを憤慨して人と獸とは全く別物であると主張する人もある獸が何か惡意ある者に造られたものなら此憤慨も有理であるが獸として矢張人間を造つたと同じ神の創造物ではないか人の位をあげる爲めに獸を罵るには及ばぬ理由である獸にも理會力の具はつて居る事は争はれぬ事實であつて時としては驚くべき理解力を有する事があるがしかし人と獸との相違は其著しい特徴を示す所の根本的大相違ある事に着眼せなければならぬのである、人は其の知覺も獸に劣り敵を威嚇する武器も有つて居らぬから一生の出發點を比較すると人は遙かに劣つて居る赤兒の時代には人は食物の製し方も住居の造り方も知らないが終には驚よりも遠く見猫にも聞えない微かな音も聞き得るやうになり鳥の巢よりも堅固で丈夫に家を建て獅子の爪牙も之に比べては玩弄物同様の武器をも發明するやうになるのであるがこれは抑も何故であらう、人の智力は一より二を知り既に知りし事より未だ知れざるを知る處の智識もある其れよりも第一は善惡を辨別すべき良心たる即ち精神を有する事が到底鳥獸と比較にならない之れを以て人は萬物の靈長とは之れである試みに思へ動物には善惡の差別もなく研究して進むと云ふ知識もなく又最も大切なるは人が道德的動物である事は罪惡を犯した後に後悔の情の起るので證明する動物には決して後悔といふものがない獅子は小動物を

裂いて食ふて快く眠るけれ共人は人殺しをして安眠が出来る筈のものでない、人類の特徴は肉眼に見ゆる物質的世界以上に此の世界を造り之れを支配する所の大切な見えぬ原因を知らんとし萬物を造化せられし神の奥に隠れてましますものを崇めかしこむ信念と云ふ根據があればこそ萬物靈長であつてもしこの眼に見へる物質的世界のみとし眼に見えぬ最、美しい良心・信念を取り去れば他の動物と同じばかりか却て凡てが劣つて居る事を自覺せねばならぬのである斯く云ひ來り論じ詰めれば人は肉體上、礦物や動物や植物と同じ關係があるとしても他の一方には全く別種のもので人は良心あり精神あり靈ある即ち神に直接の關係ある第一の神の子である事が自覺されたであらう故に人生に興味のあるのも困難のあるのも畢竟此の靈と物と二つが合致するとせぬとにある何故甲の者には此の靈と物と二つが合致し興味を興へ乙者には合致せず困難を興へるかと云ふに此の原因は即ち其の神の命令に服従すべきを自覺し服従するものは勝を得自覺せず服従せぬ物は如何に困難より脱出せしめようとするとも出来得べき筈がない世上有らゆる病氣を始め其の他の困難を脱出するには是非其神の命令に服従せねばならぬと云ふ事は充分に合點せら、又其の服従すべき道を知り得べき靈、結心、良心をも興へられある事は合點せられたであらう。

宇宙自然の眞理即ち神に服従すべき其の道は何れにあるや之れ自覺なり(信念の事なり) 本會の目的とする此の自

覺（信念）に付ては實に不可思議中の不可思議とも云ふべき靈驗の効果は恐る可きものあるは人の特質と云ふべき見る事の出来ない神秘の奥に秘める精神の作用に由るものなれば到底人類如き智力にて目前に見る能はざるは當然なり然れ共具體的に見る能はざる精神的たる處に最高の價值あり効顯あるが爲め不可思議中の不可思議たる所以にして自覺なる（信念）者は無限の眞理なる神の命令を知らざるべきを悟らねばならぬ而して自覺の道を悟ると時は最早現世に恐るべき者なく怒る可き筈なく悲しむ理なく隨て煩悶は自然消滅し最も愉快に面白く身は健康を保ち天與の生命を長壽し得可き最大無上の療道たるを知るに難からず、尙詳細に説明して見よう、人類は此の肉眼に見えぬ良心、靈、精神を具ふるゆゑに萬物の靈長と云ひ又其れあるが爲め興味も起り困難も感ずる又其れあるが爲め煩悶も起り又其れあるが爲め諸病も發し生命をも完ふする事が出来ないのである、而して又一面には其の貴き寶の良心、精神、靈あるが爲め此れを豫防し消滅既に發せし諸病も平癒せしめ又は人間以上の力を有する獸類を自由に使用し捕獲し重大の木石等有れる物品を欲するがまゝにし慾望を満し以て生命をも完ふし得らるゝ事も絶對に出來得る事の自覺が第一の必要條件たる事を思はねばならぬ又自覺は必ず眞理に基く可き自覺でなくてはならないのである此の自覺の力は到底他に及ぶべきものでない諸君は今日の文化の大砲とか飛行機爆弾とか恐る可き者と思ふが自覺の前には何程の價值もないものである其の者あるを知れば此れを豫防し防禦すればよい且つ其の元は皆

人間の知識に依り作られたる一小物に過ぎないではないか何ぞ恐るゝに足らんや唯恐るべきは此の自覺する知識即ち不自覺程世の中に恐る可き大敵はないのである、自覺の力の偉大なるは前章の如く如何なる事をも成し得べき力あるかを示せば自覺は人の生命を左右す既に此の一言にて盡して居る。

現代人の疾病の多くは自から招き貴重なる生命を自殺するを悟れ 現時世の死亡者に關しては老枯者以外の數多きには何人も驚くの外なく諸病中肺病其の他傳染病或は不治症など勝手に名稱を附し恰も死刑の宣告を受けたるもの

如く自殺に近き精神的恐怖心を起さしめ死に至らしむるもの幾萬否百中と云ふも過言にあらざる實に戦慄すべき問題と云はずして何んぞや諸君は精神的とか煩悶とか云ふ文字は一種の流行語の如く又何人も有するものゝ如き輕卒の事柄と思意するは思はざるの甚敷なり。

煩悶は萬病の本且つ命を奪ふ基なり、と云ふ新句を一般に知らしめんとするのである 諸君は凡て過劇の刃傷とか銃殺

とか棍棒にて毆打致死の如き者の外緩慢に來る可き病症を恐れざるは何たる愚の極ならんか、人生の最も恐る可きは内敵にして外敵は決して恐る可き者にあらず又防備の道あるも内敵は防ぐに道なく尙且つ猛烈否確實たるを悟らざるか而して煩悶は如何なる原理に由り恐る可きかに付き茲に

一言す驚く勿れ、精神に煩悶を來す時は第一食欲を減退し睡眠を防げ呼吸を不規則にし消化を不能にし性情を激せしめ品性を歪め精神を惰弱にして病を醸し而して身の健康を害す人の致死的原因には種々の名目あるも其の實煩悶が眞の原因となるものにして何故斯かる現象を來すかと云へば尤もはかり易く述べれば煩悶は乃ち心の疲勞となり心の疲勞は血管の收縮となり血管の收縮は血液不循環となり不循環は神経の衰弱となり衰弱は病を形成するなり煩悶は乃ち怒り恐れ悲むが故に血管は忽ち收縮す收縮するが故に血液は心臟に集まらんとす而して心臟は全身の血液を容るゝに足らず然れ共血液は蓋辨を押入るが故に脈搏は忽ち瀕繁となり心臟は之れに堪ゆる能はず割合に血管の多き顔面部に向つて溢れ出づるが故に顔面は直に紅色を呈す尙煩悶止ざれば血液は凝りて蒼色となり蒼白となり遂に頭痛を起すに至る尙ほ恐れ怒り止まざれば心臟の蓋辨は遂に破壊され所謂心臟破裂と云ふ事となり死亡するなり小兒又は大人が驚きの大なる餘り死亡するも脚氣患者が衝心して死亡するも均しく此の理に由るものなり又僅に羞恥の念に驅られるさへ顔面は忽ち紅色を呈するに見るも心の働きが如何に身體生理に及ぼすかを知らるゝならん是れを知らば生命は心の作用の一つにより死するも活るも健康も病弱も自由たるの理を悟るに安からん而して血管收縮の場合には恰も寒胃に罹りたる以上の状態にして悪作用を起し血管收縮の爲め身體の瓦斯乃ち排泄物は發汗の作用により蒸發氣となり體外に驅逐さるべき瓦斯の發散を妨げ體外に出づる能はずして再び體内に浸入

し來るに至る寒冒の際鼻汁を出すも即ち瓦斯を腦漏となり體外に驅逐する作用なり大小便も皆均しく有害物なれば體外に排泄するなり然して大便の秘結する人は常に頭痛持ちと云ふ習慣となるに至るものにして皆瓦斯が體内の働きを害する所以なりされば血管水縮の際身内に浸入したる瓦斯は血液と共に身體各所を循環し血液を悪化し血液の有する所の殺菌力を減滅し或は外敵又は微菌に對する抵抗力を減ぜしむるが故に寒胃の際に殊に注意せざれば病菌に犯され易きが故に寒胃の本と云ふ所以なり又血管收縮の爲め血液不循環の場所或は循環不良の場所に瓦斯は浸入し其場所が腦なれば腦病肺なれば肺病眼なれば眼病腎なれば腎臟胃なれば胃病腸なれば腸病肝なれば肝病となり皮膚なれば輕くも腫物又はニキピンバカスとなり甚敷は象皮病となるが如く其の毒素の恐るべき事は嘗て米國ワシントン大學ゲーツ博士の實驗報告に曰く斯く煩悶の際其の氣息を管により水を盛りたるコップ内に吹込む時は怒りの時は蒼色となり悲しむ時は灰白色の沈澱物を生ずると其沈澱物を一時間に吐きたる毒素の量は八十人を殺すに足る程の毒性力を有するとあり如何に諸君が一旦の怒り又は悲しみも此の瓦斯を造り身内に浸入し吐き出すかを知らば如何に重大視せず又忽がせになし得べけんや近來新名の彼ノ狂犬病の如きも狂犬に噛まれたる時の如き犬其の物に毒あるにあらず多くは犬が非常交接時期に於て多犬と競争の結果敗北を招きたる犬が遺恨やる方なく怒りに乗じて狂態となり人を噛むに至るものにして其の怒りの毒素に感染するものなり又猫鼠等に噛れたる場合

の如きも皆之の毒素に原因せざるものなし斯の如きの理により常に悲しむ人は頭痛持となり遂には神経衰弱に陥り甚しきはヒステリー狂人となる例は實に多大にして尤も恐る可きの一事たるを知らざる可らざるなり。

人類の食物を要求するは血液の必要に由るべきを

知れ 人は何故食物を要求し如何なる効を有するやと云ふに前章に云へる血液の必要に迫らるゝ

が故に多量の食物を要するに外ならず故に血液循環不良の者にありて多量の食物を要せず隨て身心は衰弱に陥り遂には取返し付かざるに至る運動の激しき者は次漸多量の食物を要するは血液循環の良しきに由るものにして血液循環は生命の第一要素にして血液循環さへ良好なれば如何なる病菌をも殺滅すべき作用あるを知らず自から煩悶し心勞し血管を収縮せしめて其の効なからしめ爲めに毒素は益々多く血液の殺菌力は減退せる有様にて恰も病魔を待つに均しく既に半病人の形の折柄附近に寒冒其の他流行病の有りと聞くや用意せる半病人の事とて忽ち本物の病以上となり且つ治療の道なきに至らむ之れ自覺なく自ら病を招く即ち内敵の恐る可き所以故に新聞其の他により衛生に勉めん爲め流行病の有るを知らしむも一面臆病者にありては却て病氣の媒介者となる例尠なしとせず又肺病の噂を耳にするや咳一つ出づれば若しや肺病にはあらざるやと忽ち肺病の友

を呼ぶ如く折柄結核菌に相遇せば病魔はよしと直ちに根柢を構へらるゝに至るものなり肺とか虎列拉其の他傳染病の微菌等は空中其他至る所に飛散せざるはなく殊に病院や公衆の出入多き電車内等には殆んど數知れず諸君の命と釣替へともすべき紙幣の如きは無数の微菌附着しあるは當事者の説明する所にして各自の戸障子や衣類又美味と思ひ舌鼓を打てるそばや料理店の器にも必らず附着するは保證付き其れに何んぞや諸君は患者に接近せざれば感染せざる如く注意するは寧ろ滑稽にして畢竟病の原因を知らず即ち自覺なきが故に迷ひを生じ恐れを抱く故に病となる西洋の或る醫士は現に虎列拉の微毒を試みに呑みしも身體に消化され何等の現象もなきを證明するにあらずや斯くの如き精神的の作用を有する人體を注射とか切開する實に誤謬も甚しきならずや心より起りし病を身體を料理し効ある可等なきを悟らざるや若し病魔に口ありとせば爰じや〜と招きあきはらいするならん近來頭痛とか肺炎心臟とか肋膜炎其の他の病に氷を用ゆる恰も流行の如し善か悪か吾輩は斷じて良法と思ひ難し如何となれば血液なるものは冷氣を與へなば直ちに冷凝して循環せず一部の循環を中止せば何れかに其の反證あるは自然の理又冷法を廢しなば其の弊は前に倍し劇烈となるは此れ又當然試みに見よ入浴後は必らず冷氣を感じ冷水摩擦後は非常に暖氣を覺ゆ其れに付き面白き一話あり乞食は寒中寒氣に堪へ難き時内より暖を取らうか外より暖を取らうか内より暖を取るには金なし寧ろ外より取ると云ひ雪中裸體となり數回倒れ轉んで採暖法を行ふと實に之れ等如きは

實驗より來れる安全の探暖法にして自然に近きを推知せらる又余輩は常に醫師の冷法を反對に温法
 を取る初め二三回は稍や苦しさを覺ゆるも後に至り益々好感を覺へ且つ中途止むるも反動來らず全
 快の早き事實の證明する處醫者は別ならんか人の營業は是非自分利己主義にて夏日傘屋は風雨を望
 み氷屋は炎天熱くが如き日を望むは之れ別に不思議にあらざる營業上人情ならん營業上の目的は藥
 價に外ならず効なきとて藥價の返納せし事は嘗て耳にせし事なし何れをも望まざるは下駄屋と米屋
 位いならん凡て何商何營業を問はず繁昌は客多きに由るは論を俟たざる處思はず話は外道に行き過
 ぎたり、然れ共茲に尤も容易に自覺し得難きは此れ迄前代々よりの因襲に由る習慣と迷心疑惑はな
 かく去り難く又當然の様なるが此れと飽迄戦ふが本療道の目的を達する上に於て大々必要にして
 且つ急務なる爲め醫學上諸病を醫藥に由り全快し得べきものなるか否やに關し茲に諸博士の名説を
 も終りに掲げ參考に供せば一讀の上全く醫藥にのみ信頼すべきものならざるを悟り神眞の自覺に勉
 むること安全の道たるを知らるべし去り乍吾輩も全々絶對に藥石なしとも云はず又用ゆる可らずと
 も云ふに非らず古より實驗し來りし藥草又は灸法等を用ゆるも又宜しからんが兎に角神の眞理たる
 大精力あるを自覺し此れを療道の根元となし後或は宜きと云ふを試みるは決して差支なく妨害もせ
 ず寧ろ良策と云ふを憚らない尙ほ次章を一讀せられよ。

醫者や藥のみで決して病氣がなると思ふは不覺

も甚だし 吾輩が云ふ所の醫者や藥のみで病がなをる者でないこと云確實なる證據をあげて見
 ようもし確實に醫藥の病を癒すとせば醫學士とか又博士とか或は肩書もない醫者の藥に區別は無は
 ずもし又區別があるとなせば博士にかへれば皆全快しさもなくば皆不幸にもなをらねばならずや事
 實を見れば決して左様でない博士や其の他醫者が手を離れた病人が他の療法で命を拾ひ得たものは
 世上何程あるか數知れぬ併しかく云ふ吾輩は斷じて醫藥でなをらぬと云ふのではない醫藥も病人が
 確かに信じた結果と相待つて其の効果が確實にあらはるゝので大體の元をたせば人間の病氣は精
 神の作用に依て病をなをすに外ならぬたと一博士も他の醫師も藥に決して違ひはあるのでない醫師
 は唯々藥は試みにさぐりつゝ丁度井中の物をいかりでさぐるのと同じく又藥は腦病とか肺病とかい
 ろゝ數の名を勝手に付け藥も皆其れゝ別にある様に思ふが決してさうではない大體を云へば如
 何なる病も胃を健やかに食物をこなしあじよくいろゝたべものさへ送れば漸々腦や其の他の病は
 しぜんとよくなるものであるから何病を問はず醫者は只食物をこなす藥の一點ばりと云ふて然りて
 ある(尙此の事に就ては後にくわしく病氣の來たる原因の處にて述べるとしやう)其れに付て諸君
 が信頼が出来か出来ないか又吾輩が危険と云ふに付て參考に次の事が或る雜誌に出て居つたからぬ
 がさして見よう。

或る月刊雜誌の掲載

日本一九月號は醫師殺人の實例を擧て云ふ、活すも殺すも隣なり而も殺すことの近時甚頻繁或は大家の名あつて學界未決の新聞を濫用し事實殺人を敢てする者少なしとせず天下の庸醫其類に倣ひ知らずして非命を奪ふこと殆んど無數現下學界の問運となりつゝある。

各種の注射液の如き其例甚だ多し、診を誤て命を奪ふもの其所置を誤て命を奪ふもの、或は診奇を弄あそんで命を奪ふもの擧げ來らば算するに違なし眞に醫道人を活かすか殺すかを疑はしむ乃ち實例を擧げ一々専門大家の論評を乞ひ是非正邪を糺明せんとすとて多くの實例を示せり。

紐育市大教授アロン、クラーク曰く醫術が人類に與ふる害毒は決して其利益を償ふものにあらず、自然に放任する時は確かに快復の見込ある病者も醫療の結果生命を失ふ者擧て數ふ可らず。

英國醫學博士ジョン、メイソン、ゲート曰く醫術を科學と稱するは實に意味なき妄語なりと。

英國外科大家アカトレクウーバー博士曰く醫術は推測の上に立ち殺人に因て進歩せりと。

獨逸病地大家ヘレン教授曰く醫術は經驗を基とし推測と觀察によると云ふ外原理原則なるものゝ存在する事なしと。

英國エチンバラ大學教授グレコリー醫學博士は我が生徒に對し左の如き演説をなせり。

諸士よ醫學上事實と稱ふる、件中九十九件迄は全く虛妄にして其學說の大部分は全く無意義の妄語よりと。

醫學博士アレキサンダーエムローズ(セントルイス大學教授合衆國衛生會副會長 第九回萬國醫學大會 各員英米佛科學研究獎勵會員) 曰く吾人は極微生物の存在を非認するものに非ずと雖も此極微生物が疾病の原因なりとの説を承認する事能はず如何となれば此極微生物なるものは彼の掃除夫の如く人體の汚所を清潔にすべき任務を有す即ち人體に腐敗膿汁分解物等の生じたる場合に中和衛生清潔に對する補助をなすものなり此極微生物乃ち細菌が疾病の原因なりとの説の如きは全く取るに足らざるの愚論にして人民の疾病に對する恐怖心を高め迷信を増長するの弊害實に言語に絶するものありと。

米國有名の結核病専門家サイラスエルブリツ博士曰く醫家が過去數世紀に於ける研究と經驗の結果醫藥の力は能く斯病治療に効果あるものにあらずとの結論に到着せりと、或は曰く醫藥は野蠻時代の迷信の因襲なり藥は病を癒するものに非ず唯心を安んずるに過ぎず、故に藥に良否なし大醫の藥と庸醫の藥とは同藥を以てして其効果を異にす之れ藥により病を癒すに非らずして醫の信用程度に起因する安心なるものが病を癒する反證なり醫者は之れを知りつゝ無効の投藥をなして藥代を貪るものなりと、實に然りである余輩のみが我田引水でなく一般の注目を引きつゝある醫師の説に照し

本療道は自然の眞理即ち神の力に由るものなれば

無限と絶對的にして何病を問はず根治せざる事なきは確實にして保證する處 自然と眞理の力と美 趣味と効力は三歳の童子と雖も認むる處ならん一例を示さば一人の童子が造花を作り或る童子に示す其美を見て此の花は實も結ぶやと聞けば造花主は何と答へん此れは造り花にて自然のものにあらざれば實は結ばずと云ふならん之れ自然の力の偉大なるを自覺せる一證ならん凡て自然は急劇に成し得らるゝものにも非ず又一時的のものにもあらずして其の効果も又偉大なり然れ共人は何事によらず急劇に其の効驗を望み且つ好むものなる神より此れを見れば其の淺慕なるを責むるならん事々物々俄かに成し得られ且つ永久に其の効果を望むが如きは絶對得べからざるのみか其の間の趣味の有無に於ける又皆無と云ふ可く其の經路の難易の程度により効果に於ける趣味を異にす可く約言せば其の欲する所の目的に達せんとする間ならざる可らず即ち自然眞理の自覺に由る趣味と効果も爰に存す何故人は之の理を覺らす急激の不可能たる事柄に迷ひ煩悶し爲めに大切なる生命を毀損するに至らしむるや本療道の目的たる此の眞髓を悟らしめ以て無上の樂天地に誘導するに外ならず醫師にて病を癒さんと欲するもの自然眞理の力に由る諸病平癒なさんと欲する者との比較實例を示せば恰も太陽と風との如し風は非常の勢で歩いて居る旅人に吹きかゝつて行たけれども旅人は上衣を脱ぐどころか却て強く吹けば吹く程衣服の裏りを引締めるのでさすがの風も終に閉口してしまふ處が太陽が漸次に照り始

めて徐ろに其の旅人を温めた處が直ぐに上衣を脱ぐに至らしむるであらう故に自然の恐る可き又尊ぶ可く自然以外のものは恐るゝに足らず又取るに足らざるを悟りしならん。

本療道は人生と老枯以外には病死其の他身を終る事斷じてなきを明言す

前章に述ぶる如く神は生命を附與せられし人類に對しては老枯の外には決して死ある可き筈なく壯年幼時の不幸を見るは之れ皆自殺にして決して天與の生命を完ふせしに非らず而して神は一度生命を附與せらるゝも末世迄生存せしむ可き者にあらざる事は争ふ可らざる事實にして生あるものは死ある之れ自然の眞理なれば云ふ迄もなし唯其の死は老枯即ち現世の職分を盡し終りて後始めて身はとこしへに安眠せるも其の靈は絶對不滅にして朽ち終るものにあらず之れを知るには人類以下の動物又は植物の如き齡短かさものに照し見よ彼の靈蟲は生を保つ爲め食する桑芽の出づる期に於て始めて發生し成長し繭を作り蛾と變じ自己が子孫の絶へ春自己がざる様産卵して後始めて己が職分を全ふして後ち始めて體は枯死するを見よ又植物に至るも之れ又同様春に發芽し生長し枝葉を繁茂せしめ花を咲かし實を結び子孫を永久に遺して樹木は落葉し冬期には翌年の發芽準備の爲め根元に於て營養を吸收するを見よ兩物共に云ふ可らざる美性あり然るに人類も之れと異なる筈なきに人は幼壯者の悲しむべき死を見るは之れ皆自殺と云はずして何ぞや又之れの救濟すべき道なくして可ならんや本療道の目的は即ち茲に存す。

人は自然眞理を自覺せざる爲め無暗と死を恐れ却つて死に至る事を悟れ 世人の多くは只無暗に死を恐るゝを常とするも其の死

を恐るゝが爲めに却つて死を招き其の犠牲となるので丁度鼠が猫に睨まれると縮みあがつてしまつて其の餌食となると同じく臆病者の生命は一時の借り物同様に晝夜間斷なき恐怖心に脅かされて居るから眞の愉快を味ふことも出来ない眞の生涯は恐怖の奴隸になるやうな其のやうなさもしい淺薄のものではない人は早晚必ず一度は此の世を去らねばならぬ而して眞の此の世を去るには此の世を如何に愉快に無病健全に生活すべきかを覺ると同時に又如何に死すべきかを覺らなければならぬ其の道とは力の及ばぬことに閉口して居ることなく又病魔に犯されそれにおじて死を招くこととなく自分が希望を抱く事最も強く恰も死して猶旗を巻いて之れを衛り其の天與の職責を盡す兵士の如く一身を希望に包むの覺悟あるを要するのである又死者は何處に行つたかといふに自然の眞理たる即ち神の導きにより神の命ずる處に行くに相違ない人間は存命中にも神の命ずるまゝにて生存せし如く死しても亦神の命ずる處ある事は生死共に相違はなく又一步を進め考へ見よ現世は辛酸多く荷負ふに堪へぬ重荷ならば永い眠りを夢みるも一つの慰藉であらう何となれば人生多くは煩悶苦闘困難の現世である以上此の世の外に猶ほ一つ未來の世の人となつて安らかに息ふの期も場所もあると思へば無上の慰安である人は此の觀念にさへなれば此れ以上の者はない何が偉いとゆうて

死を賭するが如き眞勇の覺悟を與へられた人ほど高尚な偉い者が他にあらうぞ、故に吾輩は常に諸君に向つて斯ういふものである曰く、死に對しては宜しく毅然たる丈夫たるべし死は之れを恐るゝに足らず又尊ぶにも足らず、余常に葬儀に對し厚く此れを拜す之れ即ち現世に於て天與の職分を完ふし後人に偉大なる遺業せられし人と思へば如何で拜せずして可ならんや、斯く云へば諸君は云はん然らば煩悶苦痛もなく何等思慮なき小供の死に對し疑問を生ずるならん是れを余輩の云はんとする一事にして決して死する小兒の招きし死にあらす最も恐る可き最も忌む可き最も戒めざる可らざる親の自覺せざるより來る迷心、習慣、不攝生の酬ひたる因襲にして親の罪が子に來りし實證に外ならず實に恐る可きの一事件ならずや自覺を得ざる煩悶は自己一身に止まらずして子孫に其の惡因果を遺すに至るとは自覺せざる其の罪の悲惨事たる思ふさへ寒慄せざるを得べけんやである。

人間の一身は自然眞理即ち大神は最高の保護者で
其の他に保護者は絶對なき事を自覺し有ゆる迷心
や疑心や煩悶を一掃するが本療道の目的を達する
上の主眼にして若し之れを毛頭でも生ずる時は其

の効驗なき事を茲に誓ひ置く 前章にて屬々述べたる如く神は飽迄保

護者たり又確實に自衛力を附與せられある事を自覺せば決して他道に迷ざる事なきのみが却つて他に信賴し迷ふ者の寧ろ滑稽の感あるに至り自覺の眞價を認めらるゝは目前にあり然る時は心靈は改造され身體は健康は生命長壽を全ふし得べきは確實否當然と云ふ可く最も愉快に意義あり趣味る生存は期して待つべしである最早此れにて自然の眞理と大精力即ち大神の件に付ては疑心の餘地はなからん次に自覺自行術を記し終りを告ぐるであらう。

自覺自行法治療術

一、祈禱を餘念なく行ふ事 (病をなほすべく信念を持つ事) 祈禱を行ふは主神たる萬物を創造されたる大神即ち天の御中主大神に對し病魔を撲滅すべく祈禱をなす事。

二、人工補助大呼吸をなす事 之れは病者自身の堪へ得られ成し得らるゝ程度の呼吸運動法にして病者の成し得らるゝ場所に於て大陽の光線を直接に吸ひ得らるゝ場所か又は外氣を得らるゝ場所又は寢室にても宜しく

成るべく大息を吸ひ込み而してへその下へ力を入れ吸ひ込んだ息を全身に且つ手の先き足先きに迄力を入れ息を行き渡らすべき考へにて何時にても又何回でも病者の適宜の度合に於てなして後ち鼻又口或は兩方にても息をふき出すのである 此れは血の循環をよくする第一の法術なり諸君が物思ひなす時に俗にためいきとて太息をつくであらう 此れは物思ひ其他の場合息不足の證據なり此の息不足なき様するのである。

三、一日三回又五回病者の力に相應する重さの者を引き上げるのであるたとへば三貫目なり五貫目なり病者の力相應のものを一回に二三度位いづゝ引上げ力をためし毎日四五十目又一二貫目づゝ増して行く様にす又病者起き上る事出来ない病者はね床にあるまゝで片手づゝで五十目百目又三百目なり右手で二三回すれば又左手で二三回今度は足の先きで左右と順次二三回づゝ引上げるけいこをするのである。

四、其の他時々左右に手を廻し又は上げ下げし足も時々へのちみさすの

である而して休息する時には大神に祈禱をなしつつ、大息をして後ち今度は静かにやすみ安眠するがよし。

五、思ひ事は更にせぬ様にして成る可くいろくの音や聲は聞がぬ様又聞こへぬ様にするなり。

六、常につきそひの看護人は病人の氣にあふ者を撰ぶ事肝要又決して病人の氣にさからう様の事を断じてしてはならぬ。

七、氣分を見計らひおこなしく話をして聞かす其の話は大神様即ち自然の道理をとき病などに恐れしめぬ様のみかしらみでもおしつぶす如く又自分の心から病をおひ出し又なほす事に勤める様いつもこききかす事

八、病人にたいしすぐ知れるうそいつはりを云はない様會得さす事が第一で病人は凡て大人でも病めば三つ子の様な氣になるものであるから其のつもりであしらはねばならぬ事。

九、食物は成る可く米のみ用ず 少しづゝ白くした麥をませ又はねぎやな

ツバをませ味噌にて味をつけたものでよろしい病人のはよりし人には殊更玉子ごか肉そつふとか云ふ様の つよき者はよくない今時の醫者は却つて反對に滋養ごか何とかかむやみやたらによはりし體にすゝめるが余輩は絶對反對である 丁度枯れかゝりの植木につよいこやしをやるご同じ事で却つて木をからすも同様やせ地にはやせじのなりにこやしの加減が第一である をいゝ元氣になれば少しづゝつよき滋養をますのは必要である。

十、食物は色々ごめるのはよくない 本人の好むものは何でも與へるが肝心である病人が食したがるのは體が自然ご其の好むものゝ滋養を求めるのであるから其れをわるいからこて與へぬのは丁度のとのかわきたるに茶や水を禁じたのご同じ事である 體は色々物から滋養をすいごりて育つのであるほしがる時は體に其の滋養がけつぼうしておるから自然ごたべたくなるのである 但しそれかご云ふてむやみに澤山食さすのでは

ない見計ひて與へるのである又かたき者なればこなししてやはらかにして與へる昔からよく云ふ毒がへんじて薬なることはこの事である之れも現代の醫者とは反對である。

十一、麥をいりてこなこなし何病にかゝわらず少しづゝ與る事 此れは病人の體をあたゝめるので體は凡てひやすのはよくない冷へれば血はこりて血めぐりわるく隨て全體の端ばしの毒氣を取り去るには是非共血の循環をよくする必要があるゆへなり。

十二、若し體内にいたむ處ある時は決して水でひやす事は禁物である其の時は氣持がよいが後が大變あたゝめるは初二回は氣持よくなるも三四回がまんしてかへ温めると今度は氣持がよくなる又やめて後も決して其の反動はこないが冷した時止めた後の反動はこてもたへられぬものである今時の醫者は冷やすが之れも反對である但し頭はあまり温めず冷やしたい時は少しづゝなまぬるい湯でしめしめて其のかはり足の方を温め

るに勉めるのである頭をひやすかはり足を温めると思はねばならぬ人間は頭はひへて足さへ温かなれば病ひけはないのである。

十三、余輩は何病にかゝはらず熱のなき病人には灸は尤もよい事としてすゝめるのであるなぜならば灸は或る部分を温め血の循環をよくする事が第一又灸をすれば一時あつさを忍ぶため息を張りつめてあつさをがまんす前に云ふた通り息を張りつめるのは體に尤も効果のあるものである中には小供に灸してかはいそうだとこれ實に間違っているいかに小供に大息を引き息を張りつめよと云ふも出来ないが灸のあつさで勢ひ大息をつくが故に體によい此の兩得は身體に尤もよく又自然にかなつたやりかたである。

十四、入浴は凡て當分宜しからず斷じて禁ぜられよ。

次には特に健康體にして長命法の三行事を掲げ置く。

健康者神仙自覺長命法三行事

一、 毎朝洗面後太陽に向ひ大呼吸を十回内外行ふ事（治療法第一項を参照）
られよ。

二、 毎日の御飯は必ず二三割の麥を混じ常食とする事。

三、 毎朝足の三里に灸三ひを兩足にする事。

右の本療道たる神仙自覺治療自行術は一般的の用ひ行ふ治療術にして其の効
果神の如きを覺へらるべし。

追て

尙は會員にして重患長病痼疾の爲め間接治療を心より望まるゝ方は病名と此れ迄の經過現時
の容態を記し別に病人の寫眞又は自筆の氏名書を添へ申込まれるれば會主自覺治療の任に當る治療
料は御志とし心配無用

東京青山南町六ノ四八會主 宇野自覺

心靈改造 神仙自覺療道會治療法 終

大正十一年十一月二十日印刷
大正十一年十一月廿七日發行

非賣品

東京市赤坂區青山南町六丁目四十八番地

著作兼 發行者 宇野 勇 作

東京市芝區西久保廣町三十二番地

印刷者 松田 新次郎

東京市芝區西久保廣町三十二番地

印刷所 有教社印刷所

不許 複製

東京市赤坂區青山南町六丁目四十八番地

發行所 心靈改造 神仙自覺療道會 生命長壽

神仙自覺療道會入會者大募集

本會は近き將來に於て國民一致舉つて本會員たらざる可らざるの期來るを斷言して憚らず、茲に最新說に且つ驚く可き一説をあげん

現今醫界の定評となれり曰く天下動物肺腑を有するものに

して各自悉く結核菌を有せざるものなし唯日常各自の採れる飲食物其の他攝生法により知らず識らずの間、に於て自然に結核菌の播殖を防滅しつゝあるに過ぎずと

然り而して一度心事に煩悶、苦痛、迷心、疑惑等其の他不攝生に由る時は此の防滅力を減し爲めに固有の結核菌は播殖を逞し遂には一命を奪はるゝにあり實に此の論據を知るに至らば傳染病として此れを恐れ却て固有の結核菌に犯されつゝあり其れに何ぞや病菌とか消毒とか恰かも外敵の如く滑稽さ笑止千萬ふの外なし

神仙自覺療道たるを一にして自然眞理の大精力最も恐る可き最も尊ぶ可き療道たるを一

年十一

47
160

終

